



小野十三郎<sup>\*</sup> 一九〇三年大阪市に生まれ、東洋大学に学ぶ。一九二四年『赤と黒』に加わってその後の進路を決定する。以後『ダムダム』『文芸解放』『黒旗は進む』の同人としてアナキストの文学活動の中心にあり、『原始』『黒色戦線』『矛盾』等の有力な寄稿者たる他『詩神』その他の詩壇誌にも登場が多い。

一九三〇年秋山清と『弾道』を刊行してアナキズム系詩人の内部対立を批判しつつ、詩の方法論的論争を通じてその発展前進に役目を果たした。後大阪に帰ったが一九三三年の「解放文化連盟」結成の有力メンバー、また一九三五年の無政府共産党事件にかかわった。戦時中は『文化組織』に詩論を連載、後その「短歌的抒情の否定」が注目された。戦後は日本のアナキズム運動には関連しない。処女詩集『半分開いた窓』以下二〇冊に及ぶ詩集と『詩論』他数冊の評論集その他の著作あり。六人の子を育て孫十数人。現在大阪文学学校校長。

### 虚無主義に

お前の内容はね

貨物船の排水量のように

いやにドッシリと俺の脳髓の上のっかっているが

お前を繫留している鎖は

浪にゆらぎ

潮に流れるたんびに

まるで凧の糸のように 伸縮自在

どこへでもその蛎殻<sup>かきがら</sup>の喰った錨をひきずってゆく

ブルジョアの処生術のような

お前の行動の自由さ加減は

いやまったく俺を感じさせるよ

炎の歌

薪と乾草と藁の山

ありったけの石油をぶっかけて火をつけろ！

火だ！ 火だ！

炎だ！ 炎だ！

炎の柱だ！

焼けただれて墜ちかかる俺の夢だ！

なげすてる！ 炎の中に

あらゆる憎悪を！

投げこめ！ 炎の中に

あらゆる愛を！

葬れ！

過去を！

而うして焼棄せよ！

あらゆる旗と綱領を

燃える！

燃える！

燃える！

燃える！

火だ 山火事だ

森林の空から天国の王座に飛火する

あらゆる鉱脈を焼き地獄の底の底まで燃えてゆく

燃える！

燃える！

燃える！

燃える！

俺達の野蛮なすばらしい焚火だ！  
薪と乾草と藁の山

ありったけの石油をぶっかけて火をつけろ！

### 軍用道路

暗い郊外の野をつらぬいて

かなたの山麓へ

また、一直線に路がついた

月のある晩だし、このあたりは少し小高くなっているので夜目にも

ずうっと向うの果まで見渡しが利くのだ

路に沿うて林立する電柱や敷きつめられた莫<sup>ご</sup>塵<sup>ぢ</sup>や

いまや工事が完成した

月光を浴びたアスファルトの路面に

被布でおおわれた地<sup>コイロ</sup>ならしの黒い影がのび

道路のまん中に放り出されたセメントミキサ―は残骸のような白い

乾いた口を夜空に向けている

何という静かさだろう

犬の仔一匹あらわれない  
まったくいっひと静まりかえっているのである

### 鍔 と 鋺

「金子ふみ×××××が生前使ってたものだ」

そう云って仲間は手にしていたものを畳の上に並べた

それは古風な鍔と鋺であった

鍔は赤く錆びつき、異様に太い鋺は手垢で黒く光っていた。

俺は今さらのように彼女が女であったことを思い出した

ここにも彼女が一生を懸けて苦しみ戦ってきた路があった

叛逆児××フミが女性であったと云うことは必ずしも偶然ではなかつた

錆びた鍔を持ちあげてしずかに置いた。

## 老人の話

俺はあの冬の夜仲間の隠れ家ではじめて「老人」に逢った。

「老人」は俺が想像していたよりもずっと小柄で、すべての点で若々しく見えた。俺たちは炭火をかきおこし、「老人」をとりかこんで晩くまで静かに仕事の相談をした。「老人」の話しっ振りは実に魅力があった。支那やアメリカでの愉快な失敗談等も出て笑わせられたが、しかしもうそれを俺はおぼえていない。ただ一つ俺には忘れられない言葉がある。それは小坂事件でやられた仲間のこと話に話が及んだ時だ。――

「老人」は絶えず柔かい微笑を泛べながら俺たちの話すのを聞いていた。そして最後に口を利いた。「――ね。F君も結局死ぬまで古い道徳から解放されなかった人だね。いや、これがあの人を死

に追いやったようなもんだ――」

俺はかつてFの本を読んで、その無上の人なつこい純情に泣いた。

そしてどうだ、彼となんらかかわりのない人たちや物見高いジャーナリズムの手輩までが無政府主義者Fの「人間的な」半面には挙って同情の眼を注いだものだ。

「道徳、やつらの――」俺は眼をあげて「老人」の若々しい顔を見た。力の籠った表情にぶっつかった。この人がこんな考えを持っている。それはなんの不思議なことではないが、そう思うと自分の眼がしらが熱くなるのおぼえた。

軍馬への慰問

室町ノ

三井ノ

玄関口デ

白ダスキヲカケタ

四十ガラミノ

反動ノ髭ヅラガ

メガホンヲロニ

熱誠溢ルヽバカリノ名調子デ

三越帰りノ淑女タチニ

呼びカケテイタ

寒風吹きすさぶ 満蒙の野に わが将卒とともに戦える 勇敢なる

軍馬のために みなさまの御同情を 切に お願いいたしまあ  
す……………

馬ヨ、十一月ノ宇品ノ港デ 宙ニブラ下ッテイル馬ヨ アバラヲフ  
ルワセテ嘶ケ!

蔵前橋を渡る

暮れかかった蔵前の橋の上から

本所公会堂の輝く窓を見た

ゆく人たちの群、見知らない、しかも知っている千人の労働者

俺たちの一人々々が壇上に起つとき

爆発するような拍手、声援をおくる聴衆諸君

俺たちの言葉が相継ぐ中止によつてとぎれ

俺たちの弁士が壇上から控室から拉し去られようとするとき

猛烈椅子を蹴つて突っ起ち上る仲間

敵に向つて火のような呪いの言葉をあびせる彼

身をもつて横合から敵の肩に組みついてゆくあいつ

閉された扉を蹴破つて雪崩込む千人の聞き手千人の闘士たち

政治運動反対だ！

強権主義撲滅！

俺たちの解放は俺たちの腕で！

世をあげて選挙投票の欺瞞に舞い狂う今日今宵

わが全国の戦闘的労働者農民の意志は江東本所の一角へ！

前に行く四人の菜葉服

ならんでゆくボロ法被、詰襟、背広

芝浦労働、東京瓦斯工、朝鮮東興労働、全国労働組合自由連合会の

血と肉、肩をならべ、踵を接し、一団となり、あとからあとから

続々と

波立つ夜の隅田川をかなたへ

千人の労働者千人の仲間たち

——昭和五年二月八日政治運動否定大演  
説会本所公会堂に開催さる——



俺は道でヒョックリ昔馴染に逢った

奴は茫々と髭を生やし

十一月だと云うのに薄い浴衣一枚

五六冊の皮表紙の本を小脇にかかえていた

出逢うとヨウと向うから話しかけてきた

人なつっこい微笑みを浮べて

(俺たちはこいつと昔一緒に仕事をした)

(俺たちはこいつを同志と呼んだことがある)

(だが今日はもう遠く離れ去った)

(人生について悟りをひらいたという)

(ニヒリスト)

(人々は彼を気狂だと云う)

(気狂！)

俺たちは肩を並べて歩いた

無駄口をたたきあった

意味もなく笑った

何という眼だろう

そしてあの格好

俺たちは手を握った

さようなら 友だち

まあいい、健康だけは祈ってやる

生きろ！

弾き飛ばされた臆病者のユーモアを御生大事に。

いたるところの訣別

俺は友が友にそむき去る日を見た

相手の腕は折れ額に血潮のにじみ出るのを見た

俺は又一枚の表札が剝がれ一台のトラックの走り去るのを見た

トラックに積み込まれた夜具や鏡台や七輪を見た

さようなら！

がっかりしちや駄目

俺は彼女たちの明るい声を聞いた

俺は彼女たちの勇ましい沈黙と微笑を見た

そして俺は見た

一切の生温きもの、卑弱なるもの、じめじめしたるもののいくらか

がこの世界から美しく掃き清められてゆくのを

友達とは何か、女とは何か、家庭とは何か

家庭を破壊するとは何か

友情を抑え虐殺するとは何か

俺たちはそれをやった

そして俺たちはそれを知った

## 山

山がある。  
それはやや富士に似ている。  
あるいは富士そのものかもしれない。  
含銅硫化鉄の大コニーデ。  
夏日天を仰げば全山の岩肌黒光り。  
はげしく水壘に抗して  
靄を吐かず。

## 大海辺

だあれもない。  
がらんどうになったタービン工場。  
やぶれた硝子窓を潜って  
海の方へ  
雀たちが飛び抜ける。  
トタンが一枚捲かれて  
高いところにぶら下っている。  
風が吹くたびに  
ぎいぎい音を立てる。

○  
暗い海の方から

枯れた葦原や

街の方を見ている眼がある。

くづれた煉瓦や

赤錆びた鉄骨の隙間から

遠くの山や

平野や

村落の方を

見ている眼がある。

雨晒しの大旋盤は悲しきかな。

ポールやナットはいたるところに散乱している。

夕波は

さびしい音を立てて

岩壁を洗っている。

○

かえり見れば

さびしい風光ばかりだ。

私は夢に角枯れのある一本の松の大木が

海べりのあの機械工場の煤ぼけた越屋根を突き破って

夕空に暗く聳えているのを見た。

——ああ。日本は。

私は思わず声をあげた。

○

明日から工場が閉鎖される。

これからどうするのかと訊いたら

国に帰って百姓になるんだと言う。

賄にいた女の子たちも

そしたらきつといらっしやいねと言う。

ふしぎ。ふしぎ。

何処にいても

私のぐるりは百姓ばかりだ。

遠い古い小さいわが農業国。

どうか安全に

みんなそこに帰りつけますように。

○

八月某日。

わが風景の大荒廃ここに中絶す。

○

夕暮。

ひとり。

雨上りの葦原の道を帰る。

潮が引くように

半島の若者らは

みな国に帰ってしまった。

いまは言うこともない。

ここにいたやつはそれはみないやつだった。

みなおもしろいやつばかりだった。

急にだあれもいなくなつて

俺はさびしくてしょうがない。

おーい。みんな元気か。

錆びた傘歯車が一つ。

道の上におちていた。

俺は拾って

持って帰る。

○

又夢を見た。

豊後の国。国東郡。

百五十年昔の美しい夕焼雲だ。

その中にあなたはひとり立っていた。

梅園三浦。

しきりにあなたを想う。

○

(わが海と葦原への戯歌)

俺がいなくて

寥しいね。

あすこは大きくなれっかな。

アルミの湯沸し。鉄の鍋。

悪魔のいない童話国。

小さな煙を上げている。

遠いはるかな海と葦。

○

冬のはじめ。

泥濘の路。

国道を外れて

暗い寒いあの海の方へ

横倒しにしたボムベを積んで

一台の馬力がゆく。

荒れはてた故国よ。

道はやはりあちらだ。

○

雨歇みて

風吹く。

海に白馬立ち

葦原は水溢れ満つ。

わがゆくところ悉く

殿堂にして廃墟。

乱雲西方に連なる。

金光燦爛たり。